

詩篇23篇 「羊飼いなる主」

1A 満たす羊飼い 1-2

2A 導き手 3-4

3A もてなす主人 5-6

本文

詩篇 23 篇を開いてください、私たちは午後に 22 篇から 24 篇までを読みたいと思っています。23 篇は、最も信者たちに好まれている聖書箇所の一つです。私たちは前回、ダビデ王が諸国の敵を戦うことによって、そして国々の頭となることによって、救われたことを読みました。そのように戦いが絶えないダビデでありましたが、彼の心は平安で守られていました。その心の中身が示されているのが、23 篇です。彼を支えていたのは、「主が羊飼い」という、神との親密な関係でした。

私たち日本に住む者たちは、なかなか羊を飼うことについては馴染みがなく、羊飼いについて想像ができません。そして欧米にあるような大きな農場で羊を放牧するのではなく、イエス様が例えで使われた「百匹の羊のうち、一匹が迷った」というのがあるように、せいぜい百匹という小さな群れでありました。イスラエルやその周辺では、今でも牧童の姿をあちこちで見ることができます。

そして羊飼いは歴史があります。実に、天地創造にて神が六日目に動物を創造された時に、家畜を造られました。人の始まりから羊を飼っていました。それからアダムの子アベルは、羊飼いで兄カインから殺されてしまいましたし、長い歴史を持っています。そして約束の地で天幕生活をしていた族長も、羊を飼うことは生活の大きな部分を占めていました。そこでヤコブが、こんな発言をしました。「きょうのこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神。(創世 48:15)」彼が息子ヨセフに遺言を残す時に発した言葉です。ヤコブ自身が羊飼いでしたが、今、主が自分を導いてくださったことを考える時に、彼自身が羊のようであり、主が私を養い、守り、導いてくださったことを実感していました。

ダビデもまた、幼少のころから羊飼いでした。そしておそらく、ヤコブの言葉も思い出したことでしよう、23 篇を「主は私の羊飼い」という言葉から始めたのです。後にイエスはご自身がそのヤハウェであられ、「わたしは良い牧者です。(ヨハネ 10:14)」と言われます。ですから、詩篇 23 篇はイエス様ご自身と、私たちの関わりを言い表してもいます。

ダビデは 23 篇で、1-2 節において主が自分を満たしてくださる羊飼いとして描いています。3-4 節では羊飼いの働きの中でも導き手としての主について話しておられます。そして 5-6 節で、羊飼いから離れて、家の主人のようなもてなしをしてくださる主の関わりを見ることができます。

1A 満たす羊飼い 1-2

23 ダビデの賛歌 1 主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

ダビデは自分自身が羊飼いだったので、その働きがいかに大変かを知っていました。ある兄弟が実際に家畜を飼うバイトをしたことがあるので、彼が家畜毎の習性を教えてくれました。聖書では、牛は犠牲のいけにえになる家畜の筆頭ですが、目の前に屠るための鈍器を持ってきても、一動だにしないそうです。私は「羊はどうか？」と尋ねました。彼の口から出た一声は、"dumb"（お馬鹿さん）でした。一番世話が焼ける家畜のようです。話を聞いていると、ちょうど二歳ぐらいの子供を世話している感じに聞こえました。乳児であれば大人しく眠ってくれますし、四歳ぐらいになると自分のことは少しずつできるようになりますが、そこまで行っていない、でも元気で、やんちゃで、何をしてもかすか分からないので、目を離すことができない。そんな感じに聞こえました。

羊は暑さに弱く、水を与えずに夏の日歩かせ過ぎると死んでしまうので、それゆえ、羊に水を与えるのは羊飼いの大切な仕事です。けれども、導かないと決して動けないのが羊です。目が悪いということもありますが、方向感覚が悪いのです。巣に戻るという本能を多くの動物は持っていますね、主人がどこにいるかを本能的に知っていて、どこに戻ればよいかわかっています。ところが、羊にはそれがありません。また、草を食べる時、万遍なく食べるという発想はまるでありません。あるところを食べたら、そこばかりで食べて、ついに土地を荒らしてしまうほどになります。ですから、羊飼いが場所を動かして、他のところに移らせないとけません。さらに、羊は臆病で、その反面、頑固だそうです。つまり、不安でびくびくしているので、羊飼いに頼るのですが、反面、勝手に進んでいき、群れから離れて危険なところに行って自滅する習性もあるようです。

このように説明していて、なんか自分のことを話されているようです。自分がキリスト者として、まるで羊のようではなかったか？お馬鹿さんで、勝手に動きまわって、さぞかしイエス様は私に手を焼いていたのではないかと思いました。事実、聖書では羊のことについて、こう言っています。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かっていった。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ 53:6）」勝手な道に向かっていく、迷える羊です。

しかしイエス様は、「良い羊飼いは、自分の命を捨てる。」と言われました。無私になって、羊の世話をし、いざとなったら自分の命を捨てることも厭わないのです。そして事実、イエス様は私の咎のためにご自身の命を捨ててくださいました。ですから、もっぱら羊飼いであられる主によって、今の自分がいます。

そこでダビデは、「私は、乏しいことはありません。」と言いました。詩篇 34 編 9-10 節に、ダビデが同じことを告白しています。「主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けるこ

とはない。」若い獅子でさえが飢えるのに、自分自身は良いものに欠けることはありません。つまり、自分よりも賢い人は世に数多くいます。そのような人でさえ、不足を感じて生きているのに、自分は満ち足りています。また自分よりも力のある人なのに、いろいろなことで事欠いているのに私は不足を感じていません。主が羊飼いだからです。

使徒パウロが、この満足を次のように話しました。「わたしはどんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。(ピリピ 4:11)」そしてテモテに対してはこうも話しています。「満ち足りる心を伴う敬虔こそ大きな利益を受ける道です。(1テモテ 6:6)」

そして、「主は私を緑の牧場に伏させ」てくださるとあります。「伏す」のは、横たわることです。草をたくさん食べて、ゆっくりしている姿です。先ほど話したように、羊は過敏な動物です。不安があると伏すことはありません。また他の羊と仲良くできないと緊張して、伏すことはありません。害虫なども不快にさせます。けれども、これらのものから守られて、たくさん食べたからこそゆっくりできているのです。その守りを主が私たちのためにくださっているのです。

イエス様を羊飼いとして、どんなにストレスのある、不安な中にあっても休息することを学ばないといけません。イエス様は、私たちに動いていたとしても休まるようにしておられます。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。(マタイ 11:28-29)」

そして、「いこいの水のほとりに伴われます」とあります。再び、憩いという休息を与えておられます。そして水によって生かされます。イエス様は、サマリヤの女に向かってこう言われました。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。(ヨハネ 4:13-14)」サマリヤの女は、ヤコブの井戸のことを指していましたが、イエス様は生きている命の水を、あなたのほうからわたしに欲しいと願うでしょう、もしわたしが誰であるかを知っているなら、と話されました。けれども、女のように物質的なことに関わってはいは、いつまでも渴いてしまいます。しかし、主は私たちの魂に、泉を与えてくださり、永遠のいのちに至る水を湧き出させてくださいます。

2A 導き手 3-4

3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

主は羊飼いとして、私たちを導いてくださいます。初めにしてくださるのは、「たましいを生き返ら

せる」ことです。「生き返らせる」という言葉には、「新たな力を与える」という意味合いが含まれます。ですから、イザヤが次のように預言したとおりです。「若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。(40:30-31)」力のある若者であっても疲れぬ。もう主のための働きで疲れてしまった、という人が多いです。そして、弛むというのは、霊的に良い意味の緊張感がなくなることです。目を覚ましていることがなくなっていることです。疲れすることもなく、たゆむこともなく、主を待ち望んでいるので新たな力を得ます。

そして、「御名のために」とダビデは言います。自分が主に守られ、満たされていることは、私のためではないのです。主ご自身がご自分の名誉にかけて行なってくださっているのです。預言者イザヤは言いました。「わたしは、わたしの名のために、怒りを遅らせ、わたしの栄誉のために、これを押えて、あなたを断ち滅ぼさなかった。(48:9)」だから安心です、主が私たちを恵みによって成長させてくださるのは、主が私たちを選んでくださったからであり、選ばれたことに対して責任を持っておられるのです。

そして、「義の道に導かれます」。ここの「道」は、「小路」とも訳される言葉です。必ずしも大きなと通りでなく、狭い道でもあります。イエス様は、狭い道から入りなさいと言われました。けれども、私たちは人生の中で、どこに行けばよいかわからなくなる時があります。しかし、主ご自身に尋ね求めればよいです。そうすれば、正しい道に主は必ず導いてくださいます。

そして、「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても」とあります。ダビデは、主が正しい道に導かれているのであれば、死と隣り合わせになるという現実も知っていました。彼は実に、死にそうになるかもしれないという苦難を通りました。私たちも、信仰をもっているがゆえに、このようなところを通してしまったということがあります。先が読めない闇、出口が見えない今、孤独な世界、こうしたものが自分の歩みにやってきます。

けれども大事なことは、「陰」であるということです。陰であって、実体ではないのです。死ぬようにみえて、実は死なないのです。使徒パウロは、そのことをこう話しています。「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくらっていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。(2コリント 4:8-10)」このように、自分の生存本能とは反対の方向へと導かれるのですが、死のように見えてそうではなく、むしろ命を証します。

もしかしら、皆さんの中に死線を越えて生還された方がおられるかもしれません。そして、今は生きているという証しを持っておられるかもしれません。宣教の働きをしていると、そのようなことがしばしば起こります。最近、エボラ熱にかかってしまった、キリスト者の医師が集中治療の後

に無事に帰国できた話を見えていますね。そして、肉体の病だけでありません。精神的な病からも守られている人々もいます。2012 年からイランで服役している、サイード・アベディニさんの妻、ナグメーさんは、世界最悪の刑務所に夫が入れられていることを知っても、このように仰っています。「**全ての理解を超えた神の平安が私の全存在を包み込み、私は全ての恐怖から自由になりました。私はもはや、愛する人の死を恐れません。私はもはやお金や健康の損失を恐れません。私はもはや未来を恐れません。私はイエス様により本当に自由になったのです。**」ナグメーさんは、精神疾患を患っても おかしくない状況にあっても、なおのこと恐れに支配されずに、生きておられます。ここでダビデが告白している通り、「**あなたが私とともにおられます**」ということだからです。

そして、「**あなたのむちとあなたの杖**」と言っています。鞭は、羊飼いが狼などから羊を守るための鞭であり、そして杖は導きを与えるための杖です。けれども、杖一本だけを持って、鞭のような代わりもし、また羊を導くための目的でも使われます。先に話しましたように、羊は怯えるのが好きなので、従順な反面、自分勝手に動く傾向があることを話しました。だから、主が導かれる時に、それによって軽く打ち叩かれることもあります。しかしダビデは、それを「**慰め**」であると言います。なぜなら、あらゆる危険から守ってくれるからです。

それは、ちょうど子を躾ける親のようであります。躾られることによって、子は安心感を持つことができます。どこまでが正しくて、この境界線を越えたら危険であることを知って、ここにいれば安心なのだということを知ることができます。躾られていないと、その境界線が明確ではないので、いつも不安です。「**なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。(ヘブル 12:10)**」

3A もてなす主人 5-6

このように、主が羊飼いとして自分をゆったりと休ませ、草を食べさせ、水を飲ませてくださり、そして義の道に導かれて、死の陰の谷を通っても恐れることがないようにしておられます。そこでダビデは、自分が今、もてなしを受けている客のように表現しています。

5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

ユダヤ人にとって、共に食卓に着くということは親密さを表し、招く相手を最大級の好意をもって受け入れていることの表れでした。神が親密さをもって迎え入れてくださっていることを示しています。ダビデがヨナタンの息子メフィボシェに恵みを施し、王の食卓で食事をしてよいと彼に言いました。イエス様も、ラオデキヤにある教会に対して食事への招きを行われました。「**見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。(黙示 3:20)**」

そして、この食事が驚くべきことに、「敵の前」において行っているということです。ダビデは常に、敵に囲まれて生きていました。もし敵がいなくなったら、ほっとして食事をするができるというならば、彼はほっとして食事をするところはなかったでしょう。しかし、敵と隣り合わせでゆっくりと、主との交わりをすることはできたのです。例えば、私たちが宣教地において、ある人がこの箇所を取り上げて、自分たちの活動を統制する側である当局の人々と食事をして証しをされた人がいました。けれども、主が親密に交わってくださいるので、むしろ心豊かに生活することができます。

そして「頭に油を注いでくださいます」とあります。これは、おもてなしをする最高の行為です。パリサイ人のシモンがイエス様を家に招いた時に、不道德な女がイエス様の足に涙を落とし、髪で拭いましたが、イエス様はシモンに、「あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女は香油を塗ってくれた。」と言われました。客に対して油を塗ることは、最高のもてなしです。そして、新約において、油注ぎは、聖霊を示します。もうひとりの助け主であられる聖霊が、どんな状況の時であっても、些細な必要であっても、私たちを覆ってくださいます。

そして、「私の杯は、あふれています。」と言っています。杯が単に満ちるものではありません。溢れ出ているのです。これがキリスト者に向けられている言葉です。神は、私たちから聖霊の働きが溢れ出てほしいと願われています。キリスト者についてパウロが語る時に、この溢れ出す関係なのだということを教えています。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ 4:6-7）」単なる神の平安ではありません、人の全ての考えにまさる神の平安です。とびぬけていますね！同じように、「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。（1ペテロ 1:8）」単なる喜びではなく、ことばに尽くすことのできない喜びです。自分にはおさえられない、あふれる杯をいただきます。

6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

ダビデは、ついに今から永遠に、つまり死んだ後にまで続く思いを話しています。「いのちの日の限り」また「いつまでも」と言っています。これまでも、ダビデが死んだ後にもある希望を話しました。「いつくしみ」とは、神の良さです。これは、神が父のように惜しみなく子に与えようとする気前良さを話しています。そして恵みは、真実な愛のことです。これが、人生のどの場面においても経験するということです。

そしてダビデは、「主の家に住まいましょう」と言ってしめくくっています。神の箱をここに運び入れて以来、彼はここで礼拝することが最も大きな情熱となりました。「私は一つのことを主に願った。

私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。(詩篇 27:4)」これが最も、ダビデが願っていたことです。何かをするというよりも、主と共にいる、主のすばらしさ、麗しさを見ていることが、他の何物にもまして情熱となっているのでしょうか？主と共に住むことは、新しいエルサレムで永遠に行われるのです。これを最上の情熱としていないのであれば、永遠に生きてもつまらないことでしょう。けれども、主のことを最上の願いとしているのであれば、死後も天において最も自分がしてみたいことをずっとすることになります。

いかがでしょうか、なぜこの詩篇が世界中の人々に好まれたのかをご理解できたのかもしれませんが。主の羊であることに徹しましょう。主の良さと恵みに拠り頼んでいきましょう。この方とただ共にいることを最上の情熱としていきましょう。